資料４

4）A展示室　：　かわりつづける自然と琵琶湖のおいたち

★現状

古い時代から新しい時代にむかって 400 万年間の琵琶湖の生い立ちを紹介

★課題

時間スケールが長いため遠い過去に起こった出来事と現在の暮らしとのかかわりが意識しにくい展示となっている

★こう変わります

生き物の進化や絶滅、大地と気候の変化など、長い時間スケールにたって初めて見えてくる世界を現在の暮らしとのかかわりとともに紹介し、未来を考える展示となります。

新テーマ：「変化し続ける大地と気候と生き物　～400 万年間から考える琵琶湖～」

【新展示のねらい】

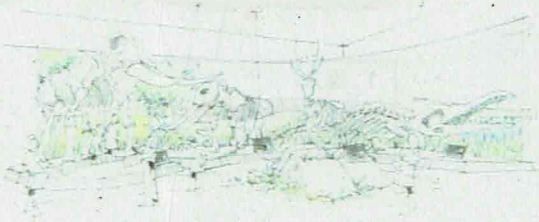
琵琶湖や生き物を生みだしてきた、数百万年～数万年という長い時間スケールでの自然環境の変化を、自然災害、地球温暖化などの現在の環境問題とのかかわりとともに紹介します。また、長期的な自然の営みという視点からみた、生き物としてのヒトを考えることで、B展示室やC展示室へのつながりをよりわかりやすくします。さらに、地域の博物館や人びとと連携した化石・岩石などの展示コーナーおよび交流を行う空間を設けることで、琵琶湖フィールドの魅力を伝えます。

新しいコーナーイメージ

＜変わる気候と森＞

○ 2.5 万年前の寒い琵琶湖地域の氷期*31 の気候（夏は 19 度、冬は－13 度）を体感し、旧石器人も食べていた大型の松の実を森で探す、見て・ふれて・感じるコーナー

○ 古代湖*32 である琵琶湖だからこそ残された湖底の堆積物からわかる気候の変化から、温暖化問題を考える



＜地域の人びとによる展示＞

○ 身近な地域の魅力、様々な発見を、その素晴らしさを最も知っている、地域の人びとととともに紹介する展示

＜変わる生き物＞

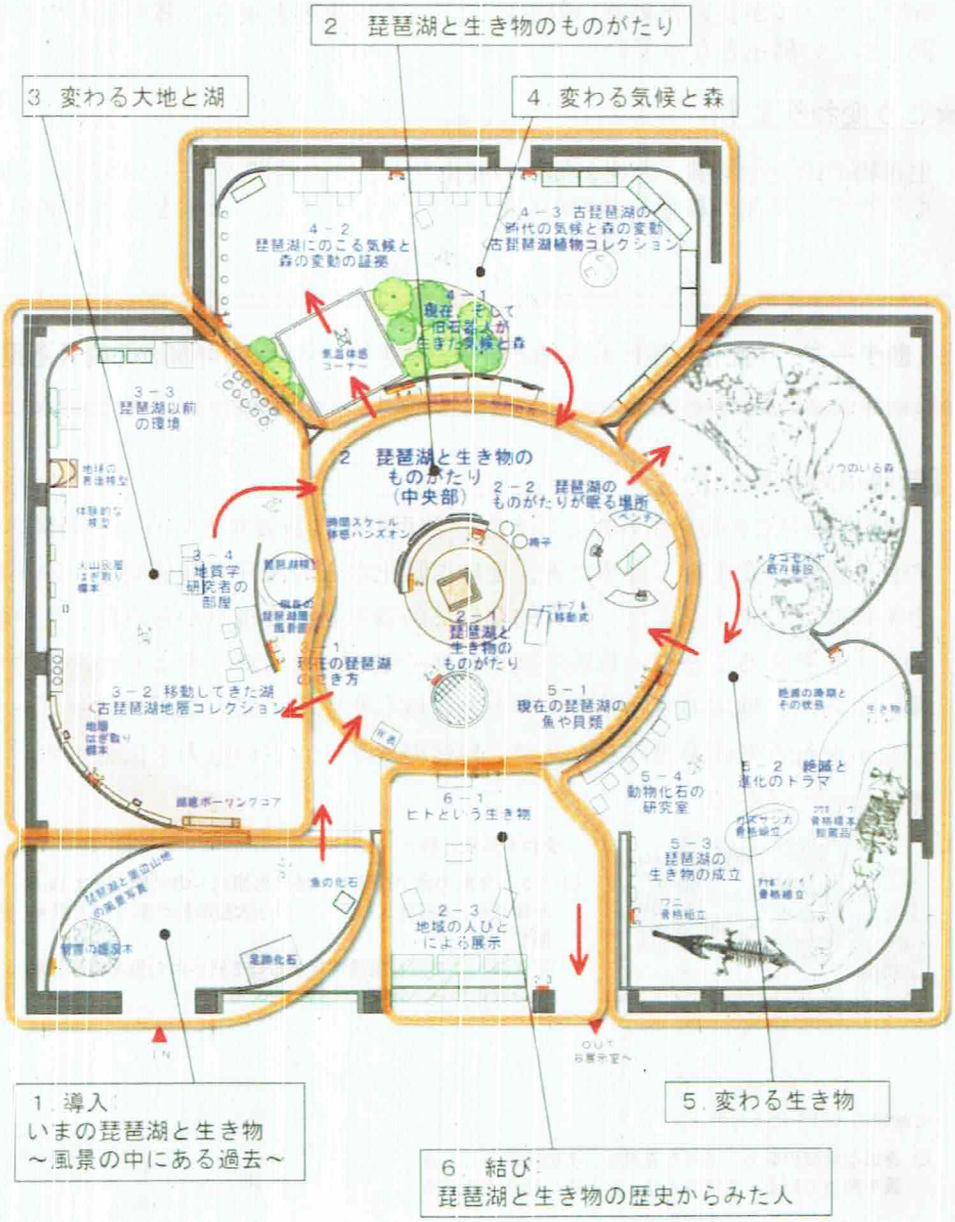
○ 琵琶湖やその周辺に生息する動物の起源、ダイナミックな進化と絶滅を、巨大なゾウやワニの化石や骨格標本で紹介

○ 過去におこった生き物の絶滅や移入のドラマを通して、現在の固有種*33 や移入種の問題を考える

＜変わる大地と湖＞

○ 日本一広い琵琶湖はいつからできたのか？また、近畿・東海地方との水系のつながりはどう変わっていったのか？災害をおこす地震などの地球の活動との関係とあわせて紹介

【Ａ展示室ゾーニングイメージ図】



5）B展示室　：　身近な自然とくらしの歴史

★現状

縄文時代以降の人間活動を中心に、湖と人間のかかわりの歴史を生業、交通、漁撈、治水・利水等のテーマで展示

★課題

湖における人間の活動の歴史が中心に展示されており、気候の変動による動植物相の変化など自然そのものの変化や、自然と人間活動の関わりといった視点には乏しい

★こう変わります

歴史展示の中に自然環境という要素を取り入れ、自然環境と自然認識の変化に軸足を置き、自然の変化と人びとの暮らしがどう結びついていたのか示す展示となります。

新テーマ：「身近な自然と暮らしの歴史　～見えない未来が見えてくる～」

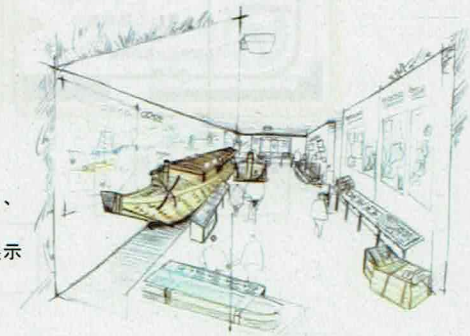
【新展示のねらい】

人が琵琶湖地域で暮らすようになったおおよそ１万数千年～数百年の時間スケールでの身近な自然の変化や人びとのかかわりの歴史を扱います。気候、地殻の変動などと関係し合いながら変化し続ける自然のなかで、人間の自然認識と自然と暮らしのかかわり、水田稲作や仏教など主に大陸から導入された新しい文化・技術の受容と独自の文化のはぐくみを二つの柱として、「いま」とは全く異なる自然のとらえ方があったことを紹介します。現在と未来を考える環境学習にも利用できます。

新しいコーナーイメージ

＜変わる自然、変わる暮らし＞

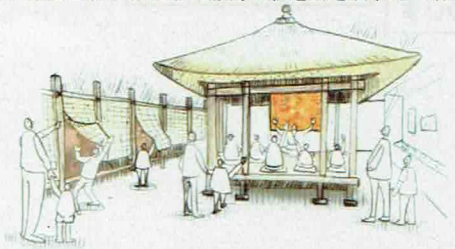
○ 琵琶湖周辺の森林について、縄文時代や弥生時代などの人びとの利用による変化を紹介し、屋外展示にある森へと誘う



＜船とともにある暮らし＞

○ 人びとが生活のために利用していた船が、簡単な形のものから、多くの荷を積み、湖上交通の主役になっていく変遷

○ 船大工がするように船釘で板をはぎ合わせて作ってみる体験展示



＜殺生をめぐる葛藤＞

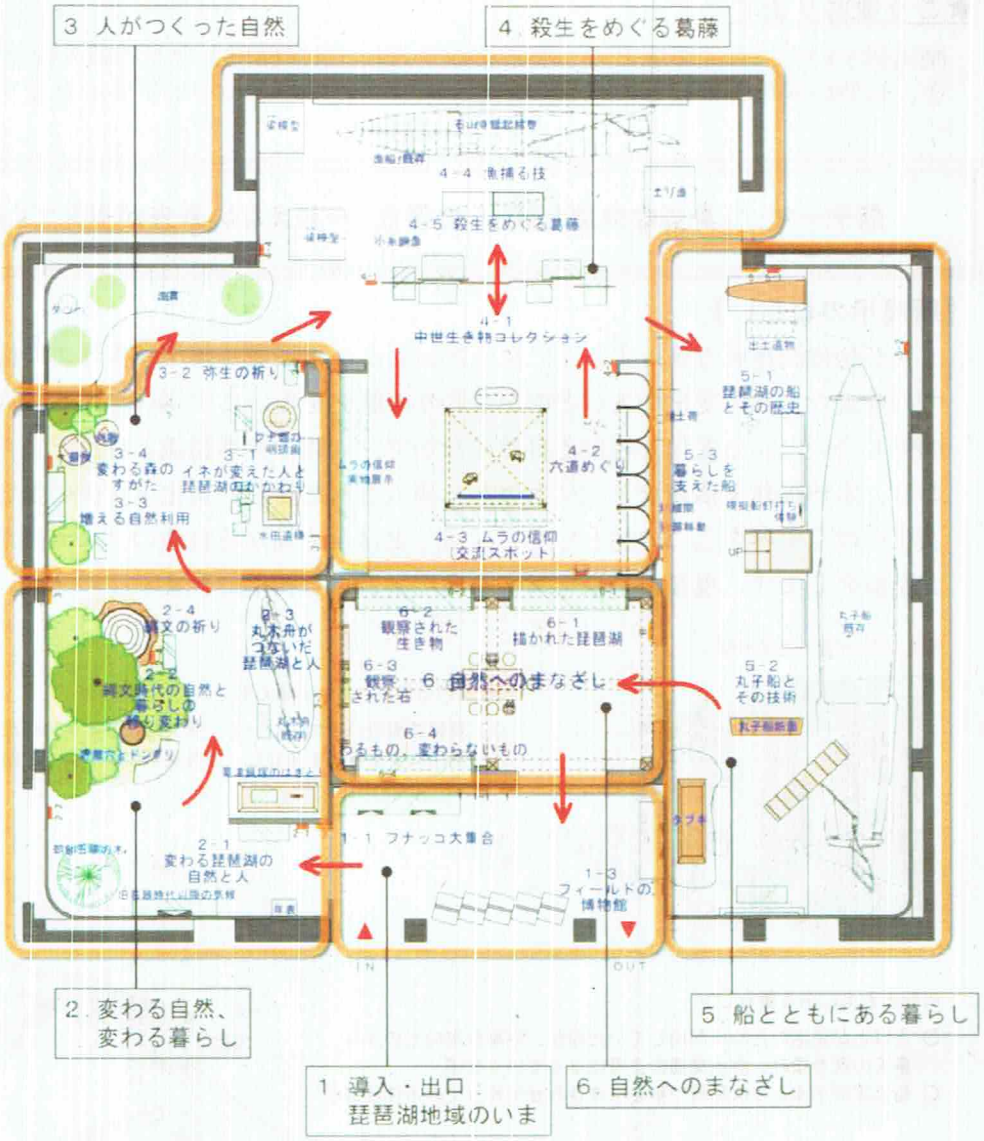
○ 当時、人間を含めた生き物が輪廻すると考えられていた六道 *34 をめぐる探検

○ お堂を模した交流スポットで、中世の人になった気分で絵巻物などの解説をうける絵解き体験

＜自然へのまなざし＞

○ 江戸時代のフナを描いた絵画やシーボルトが編集した動物誌『ファウナ　ヤポニカ』の図などを見比べながら自分でフナをスケッチしてみる体験

【Ｂ展示室ゾーニングイメージ図】



（1） A展示室

○ A展示室のテーマ

「変化し続ける大地と気候と生き物 ～四百万年間から考える琵琶湖～」

○ A展示室のねらいと全体構成

現在の琵琶湖や生き物を理解するための、数百万年～数万年という長い時間スケールでおこる大地、湖、気候、森、生き物の変化のものがたりを紹介し、現在とは大きく異なる環境であった過去を伝える。その変化が現在の環境をつくる要素となり、さらには未来へも続いていくことを知ってもらう。また、人間が関わらないでおこる長期的な自然の営みの中で見た、生き物としてのヒトを伝えることで、湖と人の関係について考えてもらう。

全体構成は、中央部で琵琶湖と生き物の生い立ちについての概要を示し、地形と湖の変動、気候と森の変動、生き物の変動のそれぞれを、3つのコーナーで詳しく紹介する。また、地域の博物館や人びとと連携した、化石、岩石などの展示および交流を行う空間を設ける。

○ 各コーナー展示のねらい

1．導入：いまの琵琶湖と生き物

現在の風景や生き物に隠れている過去の痕跡を示し、琵琶湖と生き物が歩んできた過去のものがたりの重要性を伝える。

2．琵琶湖と生き物のものがたり（中央部）

過去の琵琶湖と生き物の姿を映像で紹介。さまざまな証拠をもとに過去の復元を行う研究者の視点を伝える。A展示室で紹介する展示内容の概要をここで示して、より深く理解したい人を各コーナーへ導く。

3．変わる大地と湖

現在の琵琶湖環境や人びとが暮らしている地形的な環境は、私たちの暮らしの時間では変化していないようにみえるが、長い時間をかけてきた結果によるものであり、ダイナミックな変化がこれまでにも、またこれからも行われていること、さらに、そのような変化が災害に結びつく地球の運動によるものであることを紹介する。

4．変わる気候と森

数万年以上の長い時間では、地球規模の気候変動と、それに影響を受けた動植物の変化の記録が琵琶湖においても顕著に見られる。このような変化が起こってきた結果としての、現在の琵琶湖環境という側面から、琵琶湖地域の気候の変化や、その影響として現れた森林環境の変化について紹介する。

5．変わる生き物

現在の琵琶湖やその周辺の生き物は、ごく最近に持ってこられたものや、移入してきたものを除けば、琵琶湖の非常に長い時間の中で成立してきた。このような琵琶湖やその周辺に生息する動物の起源や、進化と絶滅のドラマを紹介する。

6．結び：琵琶湖と生き物の歴史からみた人

琵琶湖、地形、気候、森、生き物の変化をまとめ、最後にヒトの登場を示す。大きな環境変化の中でのヒトが生きてきた環境について考えてもらう。長い時間スケールからみたヒトという生き物について考えてもらいながら、B展示室へ導入する。

○ 展示の手法

過去の環境を理解するためのジオラマや参加型の展示とともに、環境を復元する根拠となる実物標本についても多く展示。最新の研究成果について随時更新を行う、新鮮で発見がある展示。地域の人びとの調査研究成果や標本を積極的に紹介する市民とつくる展示。

○ リニューアル前とリニューアル後の比較

現行の展示では、古い時代から新しい時代に向かって、時代ごとに地形、湖、気候、生き物の移り変わりを包括的に紹介している。リニューアル後の展示では、現在の環境を理解するために必要な数百万年～数万年という長い時間を要する自然の変化という視点から琵琶湖を捉え直すために、基本的に現在から古い時代へとさかのぼることで、過去から未来へつながる現在を考えるものとする。また、地形と湖、気候と森、生き物の変動とその要因について、個別のコーナーとして紹介し、それぞれの事象とその歴史、さらに現在とは大きく異なる環境であった過去についてわかりやすく伝える展示とする。

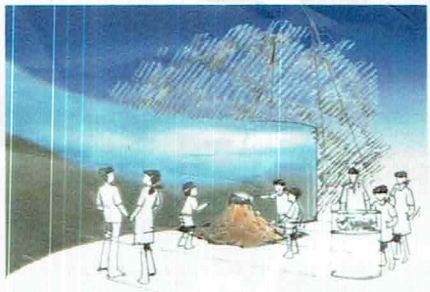
また、現行の展示では標本資料や研究の方法について、「コレクションギャラリー」と「研究室」という個別のコーナーの中で紹介している。リニューアル後の展示では、標本や研究の方法についても関連する各コーナー展示の中で紹介する。このことにより、過去の環境の変動について、その証拠や研究過程を含めて学ぶことができる展示とする。

さらに、これまでに「コレクションギャラリー」の中で、地域の人びとによる研究成果や収集標本の展示、さらに地域の専門家による来館者との交流活動を試験的に実施してきた。このような市民とつくる展示を常設展示のストーリーの中に位置づけてさらに進展させるため、リニューアル後の展示室には「地域の人びとによる展示コーナー」と博物館内外の人が利用できる「交流スポット」をそれぞれ有機的に結びつけられるように設置する。

○ 展示の詳細

1．導入：いまの琵琶湖と生き物～風景の中にある過去～

展示物案(例)：琵琶湖と周辺山地の風景写真。魚の化石。河原の埋没木。時間スケール体感型展示。



2．琵琶湖と生き物のものがたり（中央部）

2-1．琵琶湖と生き物のものがたり

過去の琵琶湖と生き物の姿を映像で紹介。さまざまな証拠を基に過去の復元を行う研究者の視点を伝える。

展示物案(例)：最も古い古琵琶湖や 200 万年前の沼沢地の時代および 2 万年前の寒冷な時代など代表的な時期の環境復元映像。動・植物化石、地層などのトピックや地形や生き物の変化の関係性を紹介。

2-2．琵琶湖のものがたりが眠る場所

琵琶湖のものがたりが理解されるようになった背景にあるフィールドの情報や調査・研究の仕方などを紹介し、フィールドの魅力を伝える。

展示物案(例)：化石発掘現場のジオラマ。
休憩・交流用の椅子
（ジオラマの雰囲気になじむもの）。交流用移動式テーブル。発掘現場の中で地層の調査や化石を探す体験型展示。代表的な化石や地層の標本。ゾウのいる森のジオラマ。

2-3．地域の人びとによる展示

フィールドの魅力に詳しい地域で活動をする人びとと協力して、フィールドの魅力を伝え、誘う展示。人びとが採集した標本や研究成果等について展示を行う。定期的な更新を行うコーナー。

展示物案(例)：可変性をもった展示ケース。

3．変わる大地と湖

3-1．現在の琵琶湖のでき方

日本一広い湖がいつからどうやってできたのかを紹介。また、湖が存続する理由が断層運動にあることを紹介し、地震が起こりやすい場でもあること、40 万年前からある広い琵琶湖、広くなっている琵琶湖、琵琶湖が存在し続けているわけを紹介する。

展示物案(例)：現在の琵琶湖周辺の風景画像。琵琶湖模型（縦横比をかえて縦を強調）。土砂部分が取り外し可能な基盤地形の模型。湖底ボーリングコア。堅田湖の時代の地層。高島丘陵の地層や火山灰。

3-2．移動してきた湖

＜古琵琶湖地層コレクション＞

琵琶湖の生い立ちは現在位置とは異なる場所から始まっていること、湖のある環境が一様ではなかったこと、移動が起こるメカニズムを紹介。

展示物案(例)：地層・火山灰層のはぎ取り標本。
琵琶湖の移動が断層の動く場所の変化で起こっていることを示す体験型展示。火山灰が見られる顕微鏡。地形の変化を示す模型。

3－3．琵琶湖以前の環境

現在の琵琶湖周辺の地形環境を知る上で必要な、より長い時間から知ることのできる環境変化や地球のダイナミックな変化について伝える。およそ千数百万年前の海だった時代や、日本列島の形成のわけ、地球規模の運動によって形成された琵琶湖地域の地盤をつくる岩石の形成について紹介する。

展示物案(例)：鮎河層群の時代の地層のレプリカ。海の化石。バイカル湖と日本海の形成の関係を示す模型。滋賀県の岩石。

3－4．地質学研究者の部屋

地層の研究方法や火山灰の分析の方法を紹介。

展示物案(例)：同じ火山灰を探す体験型展示。

4．変わる気候と森

4－1．現在、そして旧石器人が生きた気候と森

現在の琵琶湖周辺の気候と森の姿について、極東アジア地域の琵琶湖という視点で紹介。さらに、旧石器時代に人類が体験した寒冷な時代の気候を、当時の森の体験展示で紹介。

展示物案(例)：現在の気候紹介パネル。現在の森の写真、葉っぱや実の標本。旧石器時代の寒冷期の森ジオラマと植物化石、花粉化石（写真と花粉群集模型）、寒冷な時代の気候を感じる体験型展示。

4－2．琵琶湖にのこる気候と森の変動の証拠

琵琶湖のボーリング調査からわかってきた、約40万年前から現在までの琵琶湖地域の気候変動を紹介。寒冷な時代と温暖な時代が周期的に繰り返され、その気候変動にあわせて森も姿を変えてきたことを、様々な研究例と合わせて紹介する。

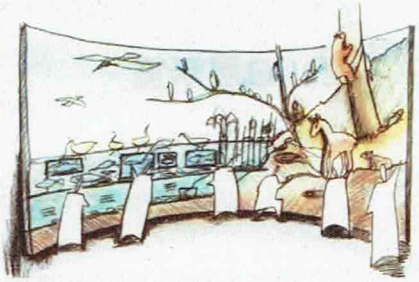
展示物案(例)：ボーリングコア試料。微小な化石写真。花粉群集模型。気候復元図。気候変動に対する森の変化の紹介パネル。植物化石。気候変動を明らかにした研究や、温暖化研究の最前線の紹介パネル。

4－3．古琵琶湖の時代の気候と森の変動

＜古琵琶湖植物コレクション＞

古琵琶湖の時代の森の変化について、数百万年の時間スケールでみた気候変動と植物の絶滅を交えて紹介する。

展示物案(例)：今の植物相につながる森林、寒冷化現象の影響と変化、古琵琶湖が誕生した頃の常緑広葉樹のイメージ図。植物の消滅と絶滅を示す化石。寒冷な気候を好む植物化石。500万年間の気候変動と植物相の変化の図。水辺、山地の環境と森の変化の図。



4－4．植物・花粉化石の研究室

植物化石や花粉化石の分析といった研究の方法を紹介。

展示物案(例)：葉化石・種子化石を探す体験型展示。いろいろな花粉の形を示す写真と模型。花粉が見られる顕微鏡。

5．変わる生き物

5－1．現在の琵琶湖の魚や貝類

現在の琵琶湖にどのような魚貝類が生息しているのか、どのような固有種がいるのか紹介。琵琶湖周辺に生息する動物たちも紹介。周辺外来種についても、移入してきた生き物として紹介する。

展示物案(例)：魚類剥製標本。貝類封入標本。外来魚類、貝類の剥製。動物標本剥製（哺乳類、鳥類、両性類・爬虫類）。パネルによるDNAで見た生物境界線の説明。

5－2．絶滅と進化のドラマ

スケールの違う絶滅の説明を行い、生物における絶滅現象について、近年の絶滅と関係させて紹介する。

展示物案(例)：絶滅の時期とその状態、原因の説明パネル。絶滅を象徴する化石。絶滅動物の模型・実物標本。コウガゾウ骨格。アケボノゾウ骨格。カズサジカ骨格。ワニ骨格。足跡化石。

5－3．琵琶湖の生き物の成立

「生き物」の変化のまとめとして、現在生息する魚や貝の固有種や琵琶湖の生き物の成立過程について説明する。

展示物案(例)：フナ類、モロコ類、ナマズ類などの模型(剥製)展示。琵琶湖の生き物の成立過程の説明パネル。古琵琶湖層群からの魚類化石。

5－4．動物化石の研究室

動物化石研究の方法について紹介。

展示物案(例)：化石発掘の様子の画像。発掘用品、クリーニング道具。最新研究方法の紹介パネル。

6．結び：琵琶湖と生き物の歴史からみた人

6－1．ヒトという生き物

琵琶湖、地形、気候、森、生き物の変化をまとめ、ヒトの登場を示す。大きな環境変化の中でのヒトが生きてきた環境について考えてもらう。長い時間スケールからみたヒトという生き物について考えてもらいながら、B展示室へ導入する。

展示物案(例)：地形と湖、気候と森、動物の変化を概略した年表。旧石器における遺物（関津遺跡出土の石器レプリカ等）。現在の道具（スマートフォン等）

(2) B展示室

○ 展示室のテーマ

「身近な自然と暮らしの歴史　―見えない未来が見えてくる―　」

○ 展示のねらいと全体構成

現在の風景や生き物に隠れている過去の痕跡を示し、琵琶湖と生き物が歩んできた過去のものがたりの重要性を伝える。

B展示においてはおおよそ2万年スケールから200年スケールでの自然と人間との関係の歴史を取り扱う。海洋や大気の変動、そして地殻の変動などと関係し合いながら変化し続ける自然のなかで、自然そのものがどう変化したのかという問題と、人間が自然をどのように認識し、どのように自然と関わって暮らしを成り立たせてきたのかという問題を二つの柱とする。水田稲作や仏教など、主に中国大陸から導入された新しい文化や技術の受容と、自然に対する独自の文化をいかに育んできたのかという問題にも注目しながら、琵琶湖周辺の暮らしと密接に関わってきた丸子船などの木造船の紹介を加えて、近代ヨーロッパの自然観を受け入れ始める時期までの「身近な自然と暮らしの歴史」について、考古資料（自然分野の資料を含む）、歴史資料や美術工芸資料、民俗資料の実物やレプリカ、ジオラマ、情報機器も利用して展示する。

○ 各コーナー展示のねらい

1．導入･出口：琵琶湖地域のいま

今の琵琶湖から出発し、展示室内を観覧後、最後にまた導入部分に戻る構成とする。

ICTを利用して、生き物（特にフナ）とどうつきあっているか問いかける。その上で、今の自然や生き物とのつきあい方として、現在に残る伝統的な要素を抜き出して展示し、一見伝統的とは思えない今の暮らしや文化が実は過去とつながっていることを、パネルを中心にレプリカなどで紹介する。

出口部分には、フィールドへの誘いのために、県内の特に歴史系地域博物館の企画展などの情報を提供する。

2．変わる自然、変わる暮らし

約1万年の間の森の変化を紹介し、琵琶湖周辺の環境変化の中で人びとがどのような暮らしを営み、その暮らしぶりを変えたのかを、おもに粟津湖底遺跡での縄文人の食生活に関する研究成果から展示する。また、土偶などにより縄文人の祈りのあり方から自然観についても紹介する。さらに琵琶湖湖底堆積物の花粉分析に基づく森の変遷を中心に、旧石器時代や弥生時代以降の状況にも触れ、過去2万年程度の時間スケールでみた湖と人のあり方を考えてもらう。

3．人がつくった自然

およそ2～3千年前に始まった水田稲作による自然や暮らしの変化を展示する。また、銅鐸に描かれた絵画から当時の人びとの自然観を紹介する。さらに弥生時代以降の人口

増加や技術革新にともなって、増大してきた自然への圧力とそれによる自然環境の変化について、森の変化と材木の利用を含めた人間活動との関わりを中心に紹介する。また、弥生時代以降の歴史時代も含めた人間活動による森の変化について紹介することで、2000年という時間スケールからみた調和的な利用とされる里山林やアカマツ林について考えてもらう。

4．殺生をめぐる葛藤

およそ1000年前から不殺生を戒律の第一とする仏教の思想が社会の隅々まで受容されていく中で、自然のとらえ方、特に漁撈を中心とした生き物との関わり方がどう変化し、「殺しておいて供養する」といわれる現在の文化がいかに成立したのかについて展示する。生き物が描かれた絵巻など絵画資料と、発掘によって出土した生き物の遺体などによって、中世の人々が生き物をどう認識していたのかを紹介する。また、古代・中世のエリやヤナなどの殺生の技術と、神饌や都市での魚介類の食文化を取り上げ、仏教の不殺生戒に基づく殺生禁断と神社の神饌を備えるための漁撈とがいかに葛藤し、折り合いをつけていたのかを紹介する。また、当時の信仰の場でだけでなく、教育の場でもあったムラのお堂を復元的に造作し、交流スポットとして展示室での交流を促す。

5．船とともにある暮らし

およそ400年前から記録に登場する丸船、丸子船を展示の中心として、琵琶湖集水域の暮らしが船とともにあったことを通時代的に紹介。琵琶湖という淡水環境のなかで生み出された丸子船はどのような技術によって造られていたのか、その造船技術とともに、誕生にいたる技術史的な展開過程を考古資料や絵画資料で紹介する。また、丸子船が江戸時代の輸送の主役だけではなく、薪、柴、炭、瓦や石など琵琶湖東西の地域間の資源の移動を担っており、他の木造船とともに暮らしを支えていたことを展示する。

6．自然へのまなざし

およそ300年前の庄屋の土蔵の収蔵品を拝見するような趣向で、地形や生き物や鉱物などへの関心が急速に幅広い層まで高まり、深い観察・測量に基づく著述や絵画・絵図が制作され始めることを、歴史資料や絵画資料をもとに、実際の生き物や鉱物の標本と対比させる形で紹介する。また、一方でヨーロッパ人によってニゴロブナなど琵琶湖の固有種の記載がなされたことも併せて紹介し、認識のしかたの違いを対比的に展示する。実際に標本をスケッチするコーナーも設ける。こうした系譜上に近代の琵琶湖研究者を位置づけ、その自然認識のあり方を紹介する。

○ 展示の手法

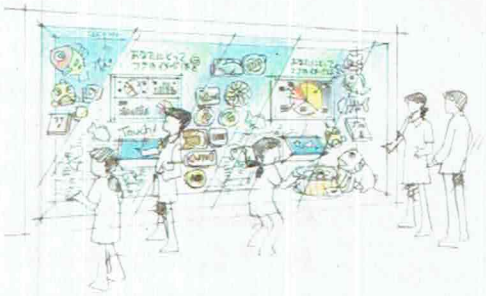
展示室で多様な交流が生まれることを重視し、まず、展示室の中央にムラのお堂を模した交流スポットを制作して、絵解きやお話し会、紙芝居、体験活動などを行う。また、展示コーナー各所に体験コーナーを設置する。資料は、実物資料を重視しつつも、長期間は展示できないためレプリカを活用し、丸子船をはじめとする漁具や漁法の模型など現展示物で利用できるものは再配置して利用する。さらに、ICTを活用した県民・来館者・地域博物館の参加型展示を制作する。

資料3　展示空間の再構築詳細案

○ リニューアル前とリニューアル後の比較

現在のB展示は、「人と琵琶湖の歴史」をテーマとして、時代区分を厳密に明示せず、政治史的視点や社会経済史的視点をできるだけ取り上げない形で、縄文・弥生時代の生業、交通、漁撈、治水・利水の各テーマについて展示しており、人間活動に重点をおいたものである。新しいB展示は、現在の視点と展示テーマを継承しつつも、琵琶湖博物館などの環境史研究の成果を踏まえて、自然そのもののあり方と人間の活動との関わり、特に人間の自然認識や自然観、生き物観の変遷、自然に対する働きかけのあり方の変化を軸にして展示する。

○ 展示の詳細



1．琵琶湖地域のいま

1-1．フナッコ大集合

ICT を利用して今のフナとのつきあい方について県民参加型・来館者参加型の調査を行い、その成果をリアルタイムで展示することで、現在の人びとと琵琶湖の生き物などとの関係やそれに対する意識を再認識してもらう。

展示物案(例)：ICT を利用した参加型調査システム。フナ料理のレプリカ。

1-2．交差するいま

現在に残る伝統的要素を抜き出して展示するだけではなく、一見、伝統的とは思えない今の暮らしや文化が過去とつながっていることを紹介する。

展示物案(例)：今の景観を示すパネルや看板、道具。

1－3．フィールドの博物館

県内の特に歴史系地域博物館を紹介するコーナーをつくり、ICT を利用して、リアルタイムで各館の企画展などを紹介する。

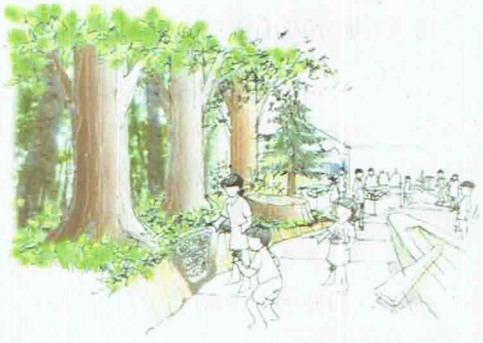
展示物案(例)：ICT を利用した他館展示紹介システム。

2．変わる自然、変わる暮らし

2－1．変わる琵琶湖の自然と人

気候変動による約 1 万年の間の森の大きな変動を紹介し、人が暮らしてきた自然環境を考えてもらう。

展示物案(例)：現在・近世・中世・弥生時代・縄文時代・旧石器時代の道具。氷期の森と落葉広葉樹林の写真。地球規模での気候変動パネル。各時期の植物化石・遺物、動物層の変遷ミニ模型。



2－2．縄文時代の自然と暮らしの移り変わり

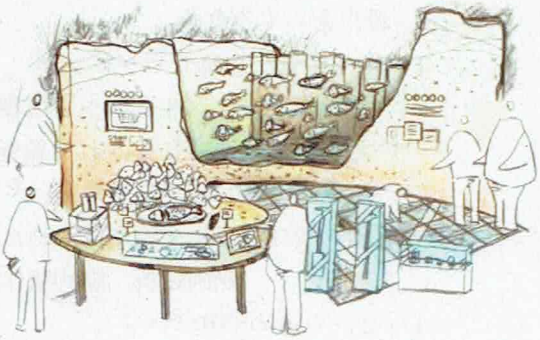
遺跡の研究成果から見えてきた縄文人の定住様式や食生活をとおした湖との関わりかたの変化を紹介。主に縄文時代中期頃までを扱う。

展示物案(例)：粟津湖底遺跡はぎとり資料。粟津湖底遺跡出土動植物遺体。食料グラフ。生業カレンダー。貯蔵穴とドングリ（発掘現場の様子と復元）、変わる季節的食料利用体験型展示。

定住様式の変化図。森の変化と定住様式の関係図。

2－3．丸木舟がつないだ琵琶湖と人

丸木舟の利用によって変わった琵琶湖と人びととの関わりかたを紹介する。主に縄文時代後期以降を扱う。



展示物案(例)：丸木舟。初期型丸木舟と後期型の違い模型。釣針、魚類遺体。丸木舟により変わった漁撈の季節的変化図。丸木舟材料樹種表、スギ林復元図、屋外展示の埋没木映像、縄文のスギ花粉量。

2－4．縄文の祈り

土偶や祭祀をとおして縄文人の祈りや自然観について紹介する。

展示物案(例)：滋賀県出土の土偶、石棒。

3．人がつくった自然

3－1．イネが変えた人と琵琶湖のかかわり

弥生時代の人びとの生活様式を紹介し、自然や琵琶湖との関わりについて伝える。特に、木材資源利用に注目して、森との関係を紹介する。

展示物案(例)：水田遺構、出土稲。水田稲作の起源と伝搬図。農耕用出土木製品、農耕具の樹種とその変化図。弥生の森復元図。フナ遺体。水田とフナの関係模型。

3－2．弥生の祈り

銅鐸に描かれた生き物たちを標本とともに紹介する。

展示物案(例)：銅鐸に描かれた生き物図

3－3．増える自然利用

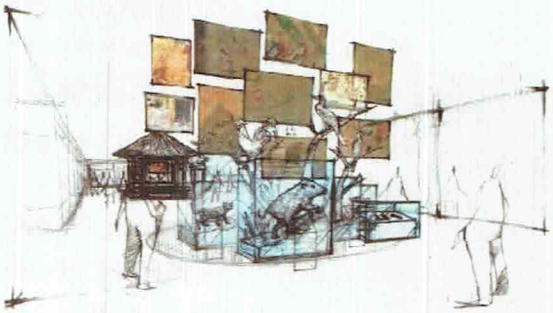
歴史時代以降の人口増加や技術革新、それによる自然への圧力の増大と森の変化について紹介する。

展示物案(例)：出土鉄器。滋賀の生産遺跡図。鉄を生み出すのに必要な森林資源量の模型。出土木材、鉄製伐採道具。人口変化図。必要燃料量と肥料量模型。木材や炭に必要な森はどれくらいハンズ・オン。変わる森の姿図と花粉模型。

3－4．変わる森のすがた

人間による森林資源の利用による二次林化やはげ山、またある程度の調和をもって維持されてきた里山や木地山について紹介し、現在の森林問題を考える糸口としてもらう。

展示物案(例)：山が描かれた真景図。近江八景、華洛一覧図と描写の正確性について図。明治の森写真。天井川紹介パネル。現在の森と昔の森の写真。



4．殺生をめぐる葛藤

4－1．中世生き物コレクション

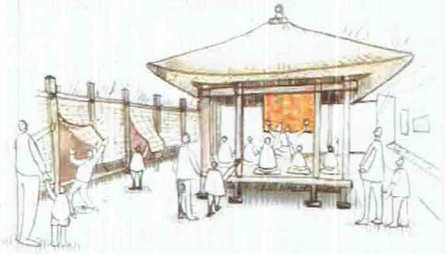
中世の人びとが生き物とどう関わっていたのかを、当時に描かれた絵巻や実際の生き物と合わせて紹介する。

展示物案(例)：生き物が描かれた絵巻等絵画資料。動物遺体。生物標本の複製や模型。涅槃図。

4－2．六道めぐり

中世の人びとの自然観に大きな影響を与えていたと考えられる仏教を中心とした当時の自然観を紹介する。一切の衆生は六道を輪廻すると考えられていたことを紹介し、特に不殺生戒を犯した人間が堕ちるとされた地獄を取り上げ、それが飢饉や災害にあえぐ人々にとって現実的なものであった当時の皮膚感覚を伝える。

展示物案(例)：六道絵。



4－3．ムラの信仰（交流スポット）

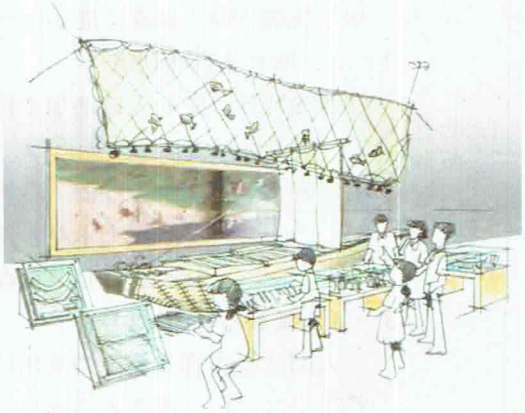
ムラの信仰のあり方を展示するため、惣堂を復元的に造作し、フロアートークや絵解きが行える交流スポットとする。また、ケース内に実物または復元した資料を安置し、その周辺に展示する。

展示物案(例)：ムラのお堂。観音菩薩立像、法具や経典、古文書。

4－4．魚捕る技

文献で明らかにされる中世から近世の琵琶湖の漁法を紹介するとともに、エリ漁を中心として漁獲技術発達の様子を紹介。また、文献には登場しない水辺の漁具も紹介する。

展示物案(例)：漁具。漁法紹介模型。



4－5．殺生をめぐる葛藤

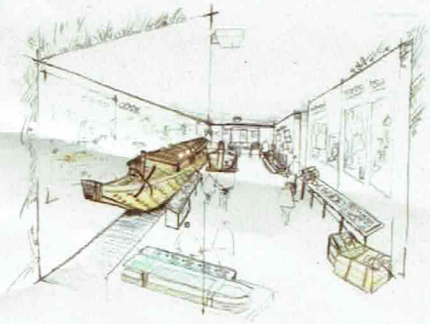
殺生禁断の資料を展示する一方で、神社に供えられた魚鳥類や都市で消費された魚類を展示し、説話などから、不殺生戒と漁撈との折り合いのつけ方を紹介する。

展示物案(例)：神饌や都市で売買される魚介類の模型、それらを使用した料理模型。殺生にまつわる説話紹介パネル。

5．船とともにある暮らし

5－1．琵琶湖の船とその歴史

琵琶湖地域の船が発達してきた過程を展示する。また、湖上交通の歴史的変遷についても展示し、丸子船という琵琶湖固有の木造船を生み出した歴史的、経済的な背景を紹介する。



展示物案(例)：遺跡から出土した舟形木製品。
準構造船と構造船の違いを示す模型。

5－2．丸子船とその技術

復元した丸子船と丸子船断面を中心に、船道具一式を展示し、構造や技術を紹介。

展示物案(例)：船道具。丸子船に使われている木材。船をつくる技術体験展示。

5－3．暮らしを支えた船

丸子船が琵琶湖の地域間の資源の移動を担い、暮らしや産業に欠かせない存在であったことを紹介。漁船、タブネも展示し、暮らしの中に船が織り込まれていたことを紹介。

展示物案(例)：丸子船が描かれた絵画資料。船の利用の変化紹介パネル。丸子船古写真。

6．自然へのまなざし

6－1．描かれた琵琶湖

日本国図屏風から伊能図まで琵琶湖が描かれた絵図や古文書等を紹介し、14世紀ごろから形状が琵琶に似ているという認識が生まれ、やがて琵琶湖と呼ばれるようになったことを紹介する。また、琵琶湖周辺の植生についても併せて展示する。

展示物案(例)：琵琶湖が描かれた絵画資料、古文書。

6－2．観察された生き物

ニゴロブナ、ゲンゴロウブナ、ギンブナなどの標本を展示し、それが近世にはどのように観察され、描かれているのか、ヨーロッパ人による記載と対比する形で紹介する。また、標本を見ながら描いてみようというコーナーを設ける。

展示物案(例)：近世に描かれた生き物図、ヨーロッパに残される当時の記載。魚標本。
標本を描く体験展示。

6－3．観察された石

『雲根志』に記載された石の標本を展示し、木内石亭がそれをどう描き、観察していたのかを紹介する。また、標本を見ながら描いてみようというコーナーを設ける。

展示物案(例)：雲根志。石亭の記述にある滋賀県産鉱物。明治以降の評価に関わる文献。

6－4．変わるもの、変わらないもの

明治になり新政権によって殺生禁断が解除され、また、近代主義的な自然観が強要されて、前近代的な自然観が否定されていく様子を紹介する。さらに、近代の琵琶湖研究者の事績や水産試験場などの開設を紹介する。

展示物案(例)：近代主義的な自然観紹介パネル